

甲状腺外科草子 44

気楽で軽い本 1

杉野 圭三

難しい名作ばかり読むと肩が凝る人向けに気楽で軽い本を選んでみた。楽しい話題の少ない昨今、小説を読むなら後味の良い本を読みたいものである。

大文豪によるものから大衆ものまで「甲状腺外科草子 15」と重複しない様に配慮した。尚、「三国志演義」、「水滸伝」、「南総里見八犬伝」などの伝統的古典物や「坂の上の雲」などの歴史ものは省いた。

文豪や文筆家の軽い本

① 坊ちゃん (夏目漱石)

漱石の小説の中でも「坊ちゃん」はユーモアにあふれ、短く良くまとまり、長く国民に愛されてきた傑作である。

漱石の難しく重い長編より初期の単純な小説が高く評価されるのは、本人にとって不本意かもしれない。



1953(池辺良) 1966(坂本九) 1977(中村雅俊)

② クリスマスキャロル (ディケンズ)

ディケンズは長編大作が多く、個人的に大好きな「デヴィッド・コパーフィールド」も中盤は冗長で退屈である。この作品は良くまとまった傑作で、原題に忠実または現代風に脚色された多くの映像化作品がある。



1970 2009 1988

③ 潮騒 (三島由紀夫)

三島由紀夫を文豪と呼ぶかどうかについては疑問もあるが、大衆に周知されドラマや映画された有名な作品は「潮騒」であろう。単純・明快な筋で映像化しやすい作品である。

吉永小百合や山口百恵主演でも有名である。



1954 1964 1975

芥川賞作家の軽い本

最近の芥川賞作家の書く本は殆どが面白くないが、時には軽い本もある。

④ 青年の樹 (石原慎太郎、角川文庫、絶版)

石原慎太郎は「太陽の季節」で1956年芥川賞を受賞し一躍、時の人となったが、いわゆる青春小説のほうが面白い本が多い。本人の意にそぐわないとみえ、殆どが絶版になっているのは残念である。「青年の樹」は1960年、1976年に映画化され、「青春とはなんだ」も1965年に夏木陽介主演でドラマ化され大ヒットを記録した。



青年の樹 映画 (1960) 映画 (1976)



青春とはなんだ ドラマ (1965)

⑤ 赤頭巾ちゃん気をつけて (庄司薫)

庄司薫も芥川賞を1969年受賞し、続編の「白鳥の歌なんか聞こえない」などで一時有名となったが、1980年以後の作品は少ない。ピアニストの中村絃子と1974年に結婚。中村絃子の「ピアニストという蛮族がいる」、「アルゼンチンまでもぐりたい」などの随筆は、ユーモアあふれ、文章力では夫君を遥に凌駕する傑作で、むしろこちらの本を推薦する。



1969(映画 1970) 1971(文庫 1973) 1992(文庫 1995)

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022年9月14日